



新旧対照的な大学本部の建物(◀)と歯科病院(▼)



## ニューカッスル・アポン・タイン大学 との学部間交流協定 — 歯 学 部 —

歯科補綴学第二講座 ◆ 浜 田 泰 三



ニューカッスル大学は、現在八学部(学生数約九千人)と大学院(約千六百人)よりなる総合大学で、カリキュラムや教育研究、機構上非常に先端的な大学である。ニューカッスル大学の歯学部は一八九五年に創立され、その後、一九七八年には学部、病院ともに

### はじめに

歯学部では、これまで本学の大学間協定の一環として、北スマトラ大学歯学部(インドネシア)、ハノーバー大学歯学部(ドイツ)と協定を締結している。またエランガ大学歯学部(インドネシア)と歯科補綴学第二講座間でも協定を締結している。このたび、歯学部の初めての学部間協定として、ニューカッスル・アポン・タイン大学(イギリス)と協定を締結した(一九九四・九・一)。

### 十九世紀に創設された ニューカッスル大学歯学部

のみならず、ヨーロッパにおける最新の設備を備えて再建された。長い伝統とともに、最新設備を誇る大学歯学部である。  
歯科材料学の分野で清輝中のマツケープ教授の前任地、バーミンガム大学に浜田が一九七八〜七九年留学して以来、両者に共通の上司ウイルソン博士とは、今日まで何度も訪問、滞在等を通して交流してきた。  
しかしこの十五年間に、バーミンガム大学では教授の交代や僚友の退官、それにもなう研究テーマの変化などがあつたため、昨年村田助手は、直接ニューカッスル大学のマツケープ教授のところへ歯科用材料の粘弾性の研究に従事することになった。この間に、マツケープ教授と浜田は研究上の交流に加え、カリキュラム、大学の将来等について意見を交え、本学歯学部内での検討の結果、交流協定を結ぶことに発展した。

### 「大人の国イギリス」との 意義深い交流とさらなるア ジア諸国との緊密な関係を

イギリスは、歯科のいろいろな分野で我々の先達である。研究、臨床両面において、その考え方は常に先端的であり、何年も遅れてはじめて日本でも取り入れられるという例を多々経験してきている。しかし、歯科材料の分野では、互角か、部門によってはむしろ我がリードしていることも多い。

大学教育については、調べてみると大変得るところが多く、現在、日本の大学改革で求められていることが明示されていることもある。特に学部組織、カリキュラムなどに参考になることが多い。ニューカッスル大学は約百年を経て、社会の変化、疾病構造の変化に伴い改組、改革を行ってきており、本学歯学部の今後のモデルともなりえよう。研究面で

はよきパートナーでありライバルである。共通のテーマについては、これまでに共同発表もしてきている。

一九九五年一月から、歯学部としては初めてのことであるが、博士課程在籍中の院生有馬君が、約六か月間ニューカッスル大学で研究を継続している。最近では大学院を三年で修了させることもよいとされているが、我々は院生四年間に幅広く、多くの経験を積むことの方を今回選択した。短期間でもあり、実験そのものは一程度であろうと考えているが、六月には私もニューカッスル大学を訪れ、マツケープ教授を交えて、学位論文のまとめもする予定である。

教育の理念も、これまでの経験から歯科疾患の多くは予防できる、との信念に基づいた大変明解なものとなっている。カリキュラムは、我が国の現行とは対比できないほど医科、歯科その他関連分野が横断的になっており、大変参考になる。研究面での相互交流を活発に行うのみならず、教育レベルでの交流は、我々にとって大いに意義深いと感じる。

いわゆる「大人の国イギリス」であるから、今回の協定もまず双方の理解のもとに成り立ち、今後も形式のみに終わらないことと思う。アジアなどの多くの国からの協定の申し込みは、一方向的で、数年後には形骸化しやすい。我々はよく姉妹協定というが、イギリスでは「Twinning」と表現し、このような一語にも教えられるところがある。今後「Twinning」を指すとともに、国際交流のバランスをとっていくためには、引き続きアジアなどとの関係も堅持したい。そのためには、なにより大学人の頭のきりかえが必要かと思う。

(はまだ・たいぞう)